

△わが国の自由教育の黎明△

木下竹次の「奈良の学習法」樹立の事情

長 岡 文 雄

主題設定について

わが国の自由教育は、大正期に開花したが、とくに、全国に大きな影響を及ぼした、東の千葉県師範附属小学校と、西の奈良女子高等師範（奈良女高師・現奈良女子大学）附属小学校とは、わが国の自由教育のメッカと呼ばれた。

奈良女高師附属小学校は、一九一九（大正八）年に、主事（校長）として木下竹次を迎えることによって、「奈良の学習法」という自由教育を展開し、「奈良の合科学習」も開拓する。「学習法」は、独自学習から出発して相互学習に及び、さらに独自学習にもどるといふ、自らの学び方という。

木下は、着任に当たり、どのような抱負をもち、どのようにして「学習法」の樹立をはかったのであろう。本稿では、木下の着任から、「学習法」の体制が整うまでの、彼の学校経営の事情を明らかにして、今日教育に示唆を得たい。

着任時の日本の教育界と木下の経歴

大正自由主義教育にとって、木下の奈良に着任した大正八年は、画期的な年であった。この年に、手塚岸衛も千葉県師範附属小学校において自由教育を始めた。また山本鼎らは長野県下で第一回児童画展覧会を開催し自由教育運動を起した。さらに、下中弥三郎らは啓明会（わが国最初の教員組合）を結成した。ジョン・デューイも来日する。なお、この二年前には、沢柳政太郎が成城学園を創設しており、前年には鈴木三重吉が児童文芸誌「赤い鳥」を創刊していた。

木下は、一九七二（明治五）年、福井県に生まれた。福井県尋常師範、高等師範（東京）を卒業して奈良県尋常師範、富山県尋常師範の教諭兼附属小学校主事を経て、鹿児島県師範学校教諭、鹿児島県女子師範学校校長、京都府女子師範学校校長となつたうえで奈良女高師の教授、同附属実科高等女学校

主事、同附属小学校主事に着任した。四十八歳であつた。

奈良女高師は、府県立師範とちがい、官立校で、東京女高師と並ぶ、日本の女子教育の最高学府として、男子教育校の東京高師、広島高師と共に、全国の教育界をリードしていた。木下の教育は、自学主義に立つが、彼の教育の根基は、鹿児島時代に培われた。木下は、鹿児島県女子師範学校長となるや、それまでに温蓄した自らの師範教育の理想を、着々と実現して、学び方を自得する「学習法」に自信を深める。

着任の抱負

木下は、着任すると、大正八年度初頭の職員会議で学校経営の大方針を明示した。(以下の主資料は「職員会議録」)

主事の意見ノ公表(大正八年四月八日)

(一) 当校ヲシテ日本ノ教育ヲ改良刷新スル上ニ存在ノ理由アラシメタイ。

(二) 協議シテ可ト是認シタルハ万難ヲ排除シテ之ヲ実行シタイ。

(三) 教師モ児童モ相共ニソノ精神ヲ理解シテ、ソノ所期スル目的ニ進ミタイ。

(四) 当校ノ教育研究ヲ適當ナル機関ト方法ニヨツテ発表シタイ。

(五) 研究ノ部面トシテハ

①、女子特有ノ教育方法ノ研究。②、学校執務ノ研

究。③、設備法ノ研究(イ)図書室、(ロ)実験実習室、(ハ)工作室、(ニ)学校園―郷土ノ全体ヲソノ範圍ニ入レタルモノ。動物ノ飼養モヤリタイ)。④、教師ノ修養方法ノ研究。⑤、児童実力養成ノ方法ノ研究(イ)教育ヲ徹底セシメル、(ロ)児童ノ士氣ヲ鼓舞スル、(ハ)児童吸引ノ方法ヲ研究スル、(ニ)能率増進ノ方法ヲ研究スル)。⑥、教生指導ノ方法ノ研究(イ)教生特有ノ技量ノ發揮、(ロ)教育ニ趣味ヲ有セシメル、(ハ)事前ノ指導、(ニ)示範ト批評)。⑦、学校ヲシテ、社会教化ノ中心トシテ活動セシメルニハ如何ニスルカノ研究。⑧、自習法ノ研究。⑨、成績考査法ヲ研究スル。

(六) 訓練ノ方針トシテハ

①、学習即訓練トシテ、児童ノ生活全部ヲアゲテ学習ニ傾倒セシメ、誠実ナル学習訓練ニヨリテ誠実ナル人間ヲ養育シタイ。②、学習ノ訓練ニハ方法ノ自得ヲハカリ、誠実ナル学習ニヨリテ誠実ノ人ヲ作ルベシ。学習ハ工夫創作的ナルベシ。自ラ疑ヒ自ラ解決スル方法ニヨツテソノ歩武ヲ進メタイ。

(七) 教授ノ方針トシテハ

①、図画手工科ハ従来、結果ニ重キヲ置キタル弊アリ。両科ハ寧ロ思想表現ノ道具トシテ重要ナル位置ヲトラシメタイ。②、何レノ教科ニ於テモ直観教授ヲ重ンジタイ。③、国語力ノ養成ハ総テノ教科ニ於テ之ヲ養成ス

ルノ主義トシタイ。④、学級、学年ノ觀念ニ余リ拘束サレ制肘サレナイ稍自由ナ教育方法ヲトリタイ。⑤、学校ノ経営上、低学年ニ於テハ合科主義ヲトリ、高学年ニ於テハ分科主義ヲトルト雖モ、主義精神トシテハ、各教科渾一統合シタル合科主義ヲ持シ、以テ完全ナル人物ヲ養成スルニ努力シタイ。⑥、体操教授ハ丹田ノ養成ニ重キヲオキ前後裁断シテ一事ニ専念シ、他意ナキ底ノ人物ヲ養成シ、以テ訓練ノ基礎トシタイ。

(ハ) 管理ノ方針トシテハ

①、校舎校地ノ利用研究。②、清潔整頓ノ留意。③、器具器械標本ノ陳列、使用ノ研究（児童自身ニモ生活上、学習上、文明ノ利器ヲ利用セシメタイ）。

ここに、木下の、出発点に立った経営の抱負が、見事に公表されており、彼の、教育改革に臨む情熱がみなぎっている。職員会議録のうえでは、その後、これだけまとまった教育方針の公表を見出すことができない。

木下は、自由教育の実践によって「当校ヲシテ日本ノ教育ヲ改良刷新スル上ニ存在ノ理由アラシメタイ」とした。そして、それを見事に現実化していくのである。協議して是認したら、教師も児童も相共に、万難を排して所期の目的の実現に進むのである。各項の内容を吟味すれば、そこに木下の自由教育への一貫した施策がみられる。「(六)」では「学習即訓練」を方針とする。そして、「誠実ナル人間」を求め、「自

ラ疑イ自ラ解決スル方法」、いわゆる問題解決学習を行わせようとする。「(七)」においては、表現、直観を重視し、既往の学級、学年の枠を超えて柔軟に実践することや、合科学習実施の必要を説いている。また、「(八)」では、「管理ノ方針」であっても、木下の意図は「器具器械標本ノ陳列、使用ノ研究」にあり、とくに「学習者」の自学に応えられるもののようにということにあった。「器具がいたまないように管理せよ」という管理主義の教育観ではない。「児童自身にも、文明の利器を利用させるように」という積極的な立場をとる。児童に、自らの「学習法」を自得させることを教育の目標にしているからである。設備法、自習法の研究を重視する。

木下の学習論は、学習方法一元論である。「学習は学習者が生活から出発して、生活によって生活の向上を図るものである。学習は自己の発展それ自身を目的とする」とする。

従来の教育と部下職員

大正六年に赴任した威勢のよい職員が五人いて「正六組」と呼ばれたが、いずれも文検の有資格者であった。千葉命吉（のちの広島県師範附属小学校主事、八大教育思潮の一切衝動皆満足主張者）、桜井祐男（のちの芦屋児童の村小学校創立者）、志垣寛（のちの教育の世紀社、児童の村小学校創立者の一人）、永田与三郎（のちの東洋図書社長）、それに藤本光晴の五人であるが、桜井のほかは早く転出する。

志垣は、木下について「当初の二年間は全く鳴りをひそめていた⁽³⁾」と記しているが、さきの教育意見の公表でもわかる通り、この言は当を得ていない。志垣は、木下に批判的でもあるが、会議録によると、教育意見公表日に欠席していて、「出席職員 志垣訓導ヲ除キ全部」とある。

木下は批判勢力もさることながら、既往の教育体質を問題とする。この附属小学校は、明治四十四年に開校したが、以来、初代主事真田幸憲のもとに、分団教授の研究を進めていた。しかし、その教育は、教師中心、厳肅画一主義であった。池内房吉は、木下時代に入ったときのことを「分団式に教えられて来た児童たちの受け身の態度は急には払拭されず、師弟とも苦行の毎日だった⁽⁴⁾」と記す。

木下の教育に賛同し、初期の時代に「学習法」を理解して実践的に開拓するのは、主席訓導の清水甚吾を中心に、河野伊三郎、山路兵一、池内房吉、大浦茂樹、小島貞三、神戸伊三郎、塚本清、鶴居滋一、秋田喜三郎、幾尾純らである。

「学習法」の樹立

大正八年——木下は先ず、整列して教室に出入りすることを廃した。厳肅主義を打破し、諸規約を改正して、自発的、創作的学風の樹立に努め、学習環境を整理し、自学自習の設備をして学習生活の発展を図ることにした。考查法を改めて考查の弊害を除いた。学風改革に世の非難は大きかった。

大正九年——従来の学区を撤廃した。清水甚吾を一年生担任にして、初めて合科学習を試みさせたが、三学期は教生実習があるので二学期でとどめた。毎朝、第一時限に特設学習時間を設け、児童各自が教師指導のもとに独自学習をするようにした。児童は各自の問題で全校の教室や教師を選んで学習した。以降二十年続く。毎日朝会の時、児童に各自工夫した運動をさせた。各教科の学習改善がやっと緒についた。自治訓練もややできるようになった。十二月には、冬期講習会（五日間、以降毎年続ける）を開いて、学習生活の方法とその指導法を講演した。会員は一二三八名であった。

この段階までを筆者は、旧体制の改革と見たい。新しい試みもするが、前進の準備である。次年度から前進を始める。

大正十年——低学力の児童で編成した特別学級を廃し、別に尋常一年生に特別学級を編成した。この学級は男女二〇名ぐらいであった。木下は、この学級に、次々に一年生を入学させて一・二・三年生を含む複式学級をつくる予定であった。兄弟姉妹相互の家族関係で学習する実態を探究しようと思図したのであった。しかし、この木下の意図は二年生までの複式にとどまった。担任は池田とぎくであった。彼女は文学に打ち込んでいた。その処女作「帰る日」は、朝日新聞の朝刊小説に公表された。教官は、池田にとどまらず、各自、幅広く、木下とともに、憶せず新天地の開拓に向かっていった。この年から本格的に合科学習を始める。池田と河野が三

年生まで続けることになった。以降二十余年合科学習が行われていく。児童の学習態度はようやく確立し、学業成績も進歩してきたので新学風に対する疑惑もやっと解け非難も少なくなった。毎日第二時限に引き続き十五分間の全校運動を行うようにした。これも以降継続していく。独得の若草山寒中登山の歩行練習行事も始めた。児童雑誌「伸びて行く」(目黒書店、月刊)を発行して全国児童の学習の友とした。

大正十一年——図書実物標本や学級園を整備し「学習法」

も充実した。参観者が年間一万人を超える。四月に、機関誌「学習研究」(目黒書店、月刊)を創刊し全国教師に「学習法」の啓蒙を行い始める。この雑誌は現在まで続いている。この年に父兄後援会ができた。オルガン、ピアノなど整備するのに支援を受け、大戦直後來校した米国教育使節団を驚かす施設を備えるに至る。音楽担当は、幾尾純であった。

大正十二年——全国に「学習法」を研究しようとする教師や学校が激増した。参観者が年間二万人を超えた。三か月の長期研究者も増えた。第四回冬期講習会には二千六百名が参会し、二百名はやむなく謝絶となった。「実践の奈良」として注目を受け、応待にも多忙となった。木下は、その代表著作「学習原論」(目黒書店)を刊行した。

大正十三年——木下の前期の経営は頂点に達する。合科学習も研究が進み、高学年でも合科主義を適用し始める。オルガン蓄音器も多数設備する。年間参観者は二一五三九名とな

る。これは、学校史上最高記録。外国人の参観者も増えた。しかし、木下は、「参観人を見遇することの親切なるは結構であるが、児童を後にするようなことのないようにせられたい」と、職員を戒める。ここに木下の真面目がある。

木下は、着任以降約二十二年間も同職にとどまり、教育の理論と実践の統一に努め、一九四〇(昭和一五)年に退く。

今日に学ぶもの

木下の実践は、六十余年も前のものであることを疑わせるほど新鮮である。現行学習指導要領作成では木下にも学び、学習者中心や合科の強調となった。しかし徹底を欠く。現場には系統主義の教え込みと、息ぬきのゆとりの時間が同居するものも見られる。教育の真の人間化を進める道は、あくまで、自らの生き方を切り開く「学習法」を自得させることにある。木下の、教育に賭けた情念、卓越した教育は、今日の教育を荒廃から蘇生させる日本の貴重な教育遺産である。

註(1) 木下亀城・小原芳編「新教育の探究者木下竹次」玉川大

学出版部 一九七二年 巻末年譜。

(2) 木下竹次著、中野光編「学習原論」明治図書 一九七二年 一三ページ。

(3) 志垣寛著「教育太平記」洋々社 一九五六年 四八ページ。

(4) 池内房吉「学習研究」復刊一五三号「奈良教育の回顧」

(ながおか ふみお 文学部教授)